



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@oki-zamami.jp



●夜の岩場のお姫さま

—オトヒメエビ—

今年もなかなか水温は上がらないのかな、と思っていたら、ゴールデンウィークが終わるところから急にあたたかくなり、25℃をこえる日がでてきました。いよいよ夏です。また夜の海に行く機会が増えます。今回は、そんな夜の海でよく出会う生き物を紹介します。

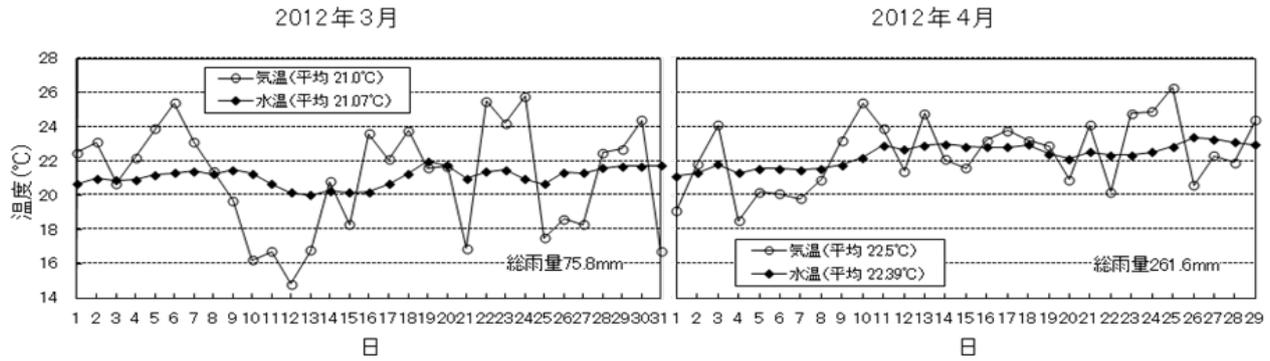
夜のさんご礁に潜っていて、ひょいと岩場で出会ったときに、いつもその美しさにしばらく目をとめてしまうのが、この生き物、オトヒメエビです。そんなに珍しい動物ではなく、ふつうにいる種類ですが、長いはさみを広げた堂々とした姿（と言っても、そのままの格好で後ずさりしてにげていきますが）で、全身が紅白の帯で彩られた上に脚のつけ根だけがちょっと紫色で良いアクセントになっています。そのあでやかさが竜宮城の「乙姫さま」を思わせることから名前がついたのですが、オスも同じ色をしているので、全部が本当のお姫様ではありま

せん。オスとメスはたいがいペアで暮らしていて、夏が繁殖^{はんしょく}時期なので、この季節には腹に水色の卵をかかえているメスを見ることがしばしばあります。

ところで、海の中では、大きな魚に他の小さな動物がまとわりついて、体の表面を掃除している光景をときどき目にします。このことを「掃除共生」と呼びますが、小さな動物にとっては大きな魚のゴミや寄生虫がエサになりますし、大きな魚にとっては体をきれいにしてもらって病気が防げるので、お互いに得のある関係です。いちばん有名な掃除屋は、ホンソメワケベラでしょうか。この魚のことを知っている人は多いでしょうし、慶良間の海でも良く見かけます。オトヒメエビも、そうした掃除屋の一つで、ウツボやニザダイなどの魚の体表を掃除すると図鑑などに書いてあります。けれども、残念ながら、まだその現場を見たことがありませんし、そもそも昼間にオトヒメエビを目撃したことがほとんどありません。もしかしたら、岩の穴や洞窟の中などの暗い所や夜ライトの当たらないところでこっそり掃除しているのかもしれない。そのうちぜひ見てみたいものです。

ところで、オトヒメエビは確かに“エビ”ですが、ほかの多くのエビとは違う仲間であることをご存知でしょうか。ちょっとややこしい分類学の話なのですが、なるだけ簡単に書くと、エビ・カニ・ヤドカリの仲間（十脚目）は、まず大きく2

定点観測



つに分けられ、1つはクルマエビとサクラエビの小さなグループで、2つ目が残りの全部です。オトヒメエビは2つ目の大きなグループに入っています。この2つ目のグループは、さらにいくつかの「下目」というグループに分けられますが、そこにはヤドカリの仲間である異尾下目、カニ仲間である短尾下目、イセエビ下目、多くのエビ類が含まれるコエビ下目などがあり、オトヒメエビはオトヒメエビ下目というそれらと別のグループになるのです。つまり、分け方だけから考えると、ほかの多くのエビ類(コエビ類)とオトヒメエビとは、ヤドカリやカニと同じくらい違うということになります。では、どこがどうちがうのでしょうか。ざっと見ただけで、エビの仲間は、(1)クルマエビ・サクラエビ類、(2)コエビ類、(3)オトヒメエビ類の3つに分かれています。(1)のグループのエビは、産んだ卵をすぐに海中に放ちますが、あとの2グループはメスが腹にかかえて育てることで区別し、(2)と(3)は、前から3番目の脚(この場合、はさみも脚に数えます)がはさみになっていなければ(2)のグループ、はさみになっていて大きければオトヒメエビの(3)の仲間になるのです(オトヒメエビの目立つはさみがこれです)。やっぱりちょっとややこしいですが、これが現在のエビ類の分類の仕方です。このように生き方や形で生き物

を区別するのが分類学ですが、研究が進んであたらしい情報が集まれば、またその区別の仕方かわるかもしれません。実際に、以前エビ類は“長尾類”として一まとめにされていた時期もありましたし、海の中を泳ぐものと底をはうものの2つに分けられていたこともありました。それが研究されていく中で今のように変えられてきたのです。もしかしたら、10年後にはまた違った分け方になっているかもしれません。私たちは何気なく“エビ”と言っていますが、分類学の中では、なかなかややこしいものです。

● 阿嘉島の海より

ゴールデンウィークでにぎわった阿嘉島も少し落ち着きを取り戻しました。今年はゴールデンウィークが始まるのと同時に沖縄地方が梅雨入りし、どうなることかと心配しましたが、後半はなんとか天気ももちなおし、観光で島を訪れた人達もよい休暇を過ごせたのではないのでしょうか。さて、ゴールデンウィークが終わるとともに海水温が急に上昇し始め、いよいよサンゴの産卵の条件も整ってきました。卵自体はまだまだ成熟しきっていませんが、この水温の上昇で成熟も進むでしょう。梅雨の真ただ中で天気も不安定になると思いますが、予想では、阿嘉島周辺のサンゴの産卵は6月上旬になりそうです。